

琉球大学学術リポジトリ

シュタイナーとフランクフル比較の試み

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-12-15 キーワード (Ja): シュタイナー, フランクフル, 精神, 自我, 人格 キーワード (En): 作成者: 寺石, 悦章, Teraishi, Yoshiaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35986

シュタイナーと فرانクル 比較の試み

R. Steiner und V. E. Frankl

Versuch über einen Vergleich zwischen ihren Philosophien

寺 石 悦 章

Yoshiaki TERAISHI

シュタイナーとフランクルは中心的な活動分野こそ異なるものの、その思想には多くの類似点が見出される。人間は心魂と身体から、あるいは身体のみからなるとする見解が有力な現代において、二人は人間が精神・心魂・身体 of 三要素からなるとし、人間を理解するためには精神の存在を認めることが必要不可欠だと主張する。

一人の人間が一つの統一された全体とみなされることを当然の前提としつつも、精神を心魂から区分し、精神は永遠の存在であって病気になることはないとする点、精神的な無意識の存在を主張する点など、その捉え方についても類似点が多い。また「人間の中心」についての呼称は異なるものの（シュタイナーは自我、フランクルは人格）、説明の内容には類似点が多い。

とはいえすべての類似点について、ここで一度に検討することは不可能である。そこで両者の比較研究のための基盤作りを、まずは本稿において行いたい。はじめに二人の生涯、哲学的素養などについて必要な範囲で確認し、本来であれば論述の中心となるべき思想の比較については「精神・心魂・身体」および「自我と人格」に関するごく基本的なものにとどめる。個々のトピックについては改めて検討する予定である。

キーワード： シュタイナー フランクル 精神 自我 人格

1 はじめに

本稿はシュタイナー(Rudolf Steiner)とフランクル(Viktor Emil Frankl)の思想を比較する試みである。

二人は共に当時のオーストリア＝ハンガリー帝国に生まれ、生存年代が20年ほど重なる上に、活動した地域も一部では重なっている。しかし中心的な活動分野が異なっており、直接の交流はなかったものと推測される。

これまで、二人を関連づけるような論述はあまりなされてこなかった¹。そのような事情も踏まえ、二人の思想の比較研究のための基盤作りを、まずは本稿において行いたい。二人の思想を比較しようという試みが決して無謀なものではないこと、そこに学術的価値が見出されると確認することが、まずは必要になると考えられるからである。

シュタイナーとフランクルを取り上げて比較する重要な理由の一つは、二人がいずれも人間を精神(Geist、霊)・心魂²(Seele、魂)・身体(Leib)の三要素からなるとする見解を唱えていることにある³。このように人間を精神・心魂・身体(あるいは霊・魂・身体)の三要素からなるとする見解自体はさほど珍しいものではない。ただし歴史的に概観する限りでは、そのような見解においてすら、精神の存在感は薄いと言わざるを得ない。精神を心魂の機能の一部(上位の機能ではあるが、あくまでもその一部)とするなど、精神を心魂に含めるか、心魂と連続的に捉えることで精神の存在をことさら

¹ 二人を関連づけた論述が皆無というわけではない。たとえば[塚田 2008a]で自由をめぐる二人の思想が比較されている他、[広岡 2008][塚田 2008]の一部ではそれぞれ無意識の教育、人生の意味をめぐる二人の思想が取り上げられている。

² 「心魂」というあまり一般的でない語を使用するのは、「精神」や「身体」と同様に漢字二文字で音読みになるので収まりがよいこと、また直前に付加語を置きやすい(「*φω*的心魂」など)といった実用的な理由が大きい。またこの語が Seele、さらにはギリシア語の *psychē* に対応すること含意しやすいといった理由もある。

³ この三つの要素はギリシア語ではそれぞれ *nūs* (または *pneuma*)、*psychē*、*sōma* に、ラテン語ではそれぞれ *spiritus*、*anima*、*corpus* に対応する。このうち *nūs* (ギ)、*spiritus* (ラ)、*Geist* は「精神」の他に「霊」とも、また *psychē* (ギ)、*anima* (ラ)、*Seele* は「心」の他に「魂」とも訳される。本稿では本文中にもある通り、基本的に「精神」「心魂」を使用する。

なお「霊」や「魂」といった語は必ずしも宗教的な文脈においてのみ使用されてきたわけではない。古代ギリシア哲学関係の文献では *psychē* が「魂」と訳されることが圧倒的に多い。

強調しない見解が有力となっている⁴。

特に近代以降は心魂と身体のみを認める心身論⁵、あるいは心魂的・精神的とされる機能のすべてを身体の機能に還元し、身体のみを認める唯物論的な見解が有力になっていることから、人間を精神・心魂・身体の三要素からなるという見解自体が珍しいものとなっている⁶。そのような中、この二人は人間を精神・心魂・身体の三要素からなるものとし、人間を理解するためには精神の存在を認めることが必要不可欠だと主張する⁷。歴史的、さらには時代的狀況を踏まえるならば、仮に類似点がこれだけであっても注目には値しよう。ただし類似点はそれだけにはとどまらない⁸。

フランクは精神的な無意識について論じている⁹。フロイト (Sigmund Freud) 以来、無意識は衝動的なものとして理解される傾向が強い中、フランクは精神的な無意識の存在を主張する。

同様の傾向はシュタイナーにも見出される。彼は心魂的・精神的活動をしばしば思考・感情・意志の三つに分けて説明する。このうち思考が基本的に意識的なものであるのに対し、意志は基本的に無意識的なものだとする¹⁰。

シュタイナーもフランクも、精神は常に健全だとする。彼らによれば、

⁴ [金子 2008] [金子 2012]などを参照。

⁵ 本稿でいう「心魂と身体」ではなく、「精神と身体」に対応する語を使用していることがある。ただしそのような場合も内容的に見れば、精神を心魂の機能の一部とする心身論と見なして差し支えない。

⁶ 二人とも、人間を身体のみ存在と捉える唯物論を強く批判している。ただしこの点は精神の存在を主張する以上、当然のこととも言える。

⁷ もちろんこれらのことは、精神・心魂・身体についてのシュタイナーとフランクの概念が完全に一致することを意味するものではない。二人の概念の異同については別稿において検討する予定である。

⁸ やや補足的な内容になるが、我々は特に意識することもないまま、あらゆるものを空間的・物質的に捉える傾向をもつ。思想を表現するために用いられる語も基本的には空間的・物質的な存在に対応しているため、精神についても空間的・物質的にイメージされやすい。シュタイナーもフランクも精神は空間的・物質的な存在ではないとして、これを空間的・物質的に捉えてしまいがちな傾向に対しては特に注意を促している。またこれに関しては、フランクが *Bei-sein* (もとに一在る) という精神のあり方を主張していることが特に注目される。

⁹ [UG] [フランク 2002] に詳述されている。

¹⁰ シュタイナーは無意識的な働きの重要性を随所で語っている。(特に精神に関しては [AMK, 105-120] [シュタイナー 1989, 91-106] などに述べられている。)

病気になるのは心魂と身体であり、精神は病気にならない¹¹。シュダイナーは「……いわゆる精神病 (die sogenannten Geisteskrankheiten) は実際には全然精神病ではありません。というのは、精神は病気にならないからです」と述べており¹²、またフランクフルは「……“精神”病 (“Geistes”-Krankheiten) などというものは決して存在するものではありません。なぜならば『精神』、つまり精神的人格それ自体は決して病気にはなりえないのであって……」と述べている¹³。

またシュタイナーもフランクフルも精神を永遠の存在だとする。これが文字通りの「永遠」を意味するのか、半永久的といったかなりの長期間を指すのかは明確ではないが、少なくとも精神が人間の死によっては終了しない可能性を二人とも認めている¹⁴。

さて二人の思想を比較する際、精神と並んで重要になるのが、自我 (Ich) と人格 (Person) である。人間の中心、私の中の私、個人を統合する中心といえるものをシュタイナーは自我、フランクフルは人格と呼ぶ。自我と人格は一般に異なる概念とされている上に、人によってその意味や用法が大きく異なる。とはいえ二人の説明はかなりの程度まで重なりあう¹⁵。自我・人格 (あるいは精神) は人間にしかない (動物にはない) 要素であり、そこに人

¹¹ これについては医師であるフランクフルの説明が注目される。彼は「病気が存在する最も主要な形式」として4つのカテゴリーをあげる ([LM, 74] [フランクフル 2000, 24])。病気の原因が精神・心魂・身体のうちどこにあり、病気の症状がどこに現れるかを単純化して「原因 → 症状」の形で示すと次のように整理することができる。

1 身体 → 身体 …… 通常の器質性の疾病

2 身体 → 心魂 …… 精神病

3 心魂 → 心魂 …… 一般的な神経症

4 心魂 → 身体 …… 器質性神経症

この4つのカテゴリーに精神は含まれていない。

¹² [ÜGK, 172] [シュタイナー2004a, 179]。

¹³ [ZT, 52] ([フランクフル 2002, 165])。

¹⁴ シュタイナーは生まれ変わりがあることを明確に主張しており、『テオゾフィー (Theosophie)』 ([TS] [シュタイナー2000] [シュタイナー2000a]) などで詳述している。またフランクフルは精神的人格 (geistige Person) が心身有機体の死滅後においても生き続けるかどうかについて、「このことは、もとより可能であるにちがいないでありましょう (von vornherein müßte dies möglich sein)」と述べている ([LM, 132] [フランクフル 2000, 185])。

¹⁵ これについては後で検討する。

間の尊厳や責任の根拠があると二人は考えている。

二人によれば、人間は人間であるというだけで無条件に畏敬・尊敬・感謝の対象になる。シュタイナーは一般論として畏敬の念の重要性を語りつつ、特に教育において教師が子どもに対して畏敬の念をもつことの重要性を指摘している¹⁶。フランクもまた一般論として畏敬の念の重要性を語りつつ、精神科医として精神病患者に対して畏敬の念をもつことの重要性を指摘している¹⁷。一般には子どもよりも教師が、また患者よりも医師が、より尊敬されるべき存在として考えられがちである。しかしシュタイナーは教師が子どもに対して、またフランクは医師（精神科医）が患者（精神病患者）に対して、畏敬の念を持つことが重要だとしている点は注目される¹⁸。

シュタイナーにとってもフランクにとっても自由は特別重要な概念であり、それぞれに詳細な論述がある¹⁹。二人はいずれも、現在の人間がそのまま完全に自由であるわけではないが、人間は自由になり得る存在だとする。彼らの主張を大胆に要約すると次のように言うことができるだろう。自我・人格は「心魂・身体」と「精神」の双方から影響を受けている。このうち「心

¹⁶ 「しかし、それ以上に必要なのは……人間本性一般に対する畏敬の念なのです」 ([OP, 11] [シュタイナー2013, 10])。「しかし、この感謝の念を絶対に持っていなければならないのは、誰よりもまず教師であり、教育者であります。子どもの教育を任されているすべての人間は、この感謝の念を本能的に持っていなければなりません」 ([GSGK, 71] [シュタイナー2001b, 113])。「子どもという不思議な存在に対する畏敬の念—この点におきましては、畏敬の念と感謝の念は区別することができません—これこそ、教育者が自分の課題に向かう際にもつべき心魂の姿勢の出発点であります」 ([GSGK, 71] [シュタイナー2001b, 113])。

¹⁷ 「もしもわれわれが、あらゆる人間に対する、したがってまた精神病の人に対する無条件な畏敬の念によって貫かれているのでなければ、われわれは精神科医にならないほうがよいでしょう」 ([LM, 109] [フランク 2000, 113])。

¹⁸ フランクは、このことが理解できないのは有用性と尊厳の違いを無視しているからだと述べている ([LM, 109] [フランク 2000, 112])。「けれども、人間の尊厳、人格としての人間の尊厳は、この精神的人格が心身的な障害によってこうむる有用性の喪失によっても、減じられたり損なわれたりすることなく存在しつづけます」 ([LM, 109] [フランク 2000, 112])。

¹⁹ シュタイナーには自由を主題とした『自由の哲学』 ([PF] [シュタイナー2002]) という著作がある。また彼が創始し、世界的に評価されているヴァルドルフ教育（シュタイナー教育）の特徴は、しばしば一言で「自由への教育」と表現される。フランクの場合、彼が語る三つの価値の中で最重要といえる態度価値 (Einstellungswerte) こそが、彼の自由について考えを見事に物語っていると思われる。

魂・身体」からの影響が強まればより不自由に、「精神」からの影響が強まればより自由になる。このような点において二人の考えは大筋で一致していると見ることができる。

これに関連して、二人が人間を進化の途上にあると捉えていることも重要である²⁰。そのような意味でも、人間は（現在は自由でなくても）自由になり得る存在として捉えられることになる。

フランクルは、当人が人生に意味を見出す／見出さないにかかわらず人生には意味があり、我々が人生に問うのではなく、むしろ我々が人生から問われているのだと主張する²¹。表現は大きく異なるものの、シュタイナーも人間には個人を超えた大きな使命があることを随所で語っており²²、またそれは当人の自覚の有無とは関わりがないと考えている。

これまでの簡単な記述からも明らかなように、シュタイナーとフランクルの間には大変興味深い、詳細に検討するに値するトピックが多数存在する²³。とはいえその検討には膨大な紙数が必要となる。そのため本稿では、まずは二人の思想の比較研究を行うための基盤作りを行いたい。本来論述の中心となるべき思想の比較については、もっとも基本的な概念である「精神・心魂・身体」および「自我と人格」に関するごく基本的なものにとどめ、個々のトピックについては改めて検討する予定である。

2 人物と著作

まずはシュタイナーとフランクルがどのような人物であることを、特に思想家としての側面に注目しながら簡単に紹介する。あわせて本稿において検討

²⁰ シュタイナーの見解については後述する。フランクルは進化をさほど強調しているわけではないものの、「それゆえ、『人類生成』は、まだまったく完成されていないのであります」(〔LM, 97〕〔フランクル 2000, 82〕)、「われわれは未だに中間人(Zwischenmenschen)のままなのであります」(〔LM, 97〕〔フランクル 2000, 82〕)などと述べている。

²¹ 〔TJLS〕〔フランクル 1993〕など。

²² 「人間は、自分自身のために長い進化を経てそこにいるのではなく、精神性を開示すべく存在している」(〔OP, 12〕〔シュタイナー2013, 10〕)など。

²³ 以上に述べたことは、二人の著作・講演等から直接読み取ることのできる内容に限られる。それぞれの思想を深く検討すれば、さらなる興味深い比較が可能になることは十分に予測できる。

の中心となる著作を挙げておく。

2.1 シュタイナー

シュタイナーは1861年に当時のオーストリア＝ハンガリー帝国、現在はクロアチアのクラリエヴェックに生まれている²⁴。

鉄道会社に勤めていた父親の意向によって実業学校で学び、やがてウィーン工科大学に進学する。幾何学や天文学などに強い関心をもつ一方で、哲学や文学など幅広い関心をもっていた。

大学在学中にゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) の研究者であるシュレーアー (Karl Julius Schröer) と知り合ったことなどから、全集に収められることになったゲーテの自然学関係の巻の編集を依頼される²⁵。シュタイナーはゲーテの自然学を研究する過程で、現代科学があらゆるものを物質として扱う無機科学・物質科学であるのに対し、ゲーテの自然学は生物を生きたままに扱える有機科学・生命科学であることに気づき、特にその方法論を明らかにするための研究に没頭する。

やがてゲーテ自然学の方法を農業・医学・建築・教育・芸術などのさまざまな分野に応用する。彼は有機農法の先駆者の一人とみなされている他、彼のアドバイスに基づいて成立した医学・薬学があり、ドイツやスイスにはその病院や製薬会社が存在する。またわが国で彼の名前が初めて知られるようになったのは建築家としてであり、現在ではシュタイナー教育の創始者としてその名前が知られるようになってきている。

晩年は活動の拠点をスイスのバーゼル近郊に置き、ドイツやスイスなどのドイツ語圏を中心にヨーロッパ各地で精力的に活動している。

シュタイナーの著作²⁶の中では『テオゾフィー²⁷』が考察の主な対象とな

²⁴ この項については〔シュタイナー2001〕〔シュタイナー2001a〕〔カルルグレン1992〕〔小杉2000〕〔シェパード1998〕〔ヘルレーベン他2001〕などを参照した。

²⁵ ゲーテは文学方面の業績で著名な人物だが、本人は自然学（今でいう自然科学、中でも色彩論）こそが自らの最大の業績だと信じていた（〔高橋1988, 4〕など）。

²⁶ シュタイナーの著作・講演（のうち記録が残されているもの）はすべて、Rudolf Steiner Verlag 社の全集 (Gesamtausgabe) に収録されている。以下において GA に続く数字は全集の番号である。

²⁷ *Theosophie* (〔TS〕〔シュタイナー2000〕)。

る。彼には特に重要とされる著作が四つあり、四大主著と呼ばれている。『テオゾフィー』はその中の一つであり、その前半では人間が精神・心魂・身体からなることが中心的なテーマになっている。この他、同じく四大主著に数えられる『自由の哲学²⁸』などを必要に応じて参照する。

2.2 フランクル

フランクルは 1905 年に当時のオーストリア＝ハンガリー帝国の首都ウィーンで生まれている²⁹。早くも 3 歳の頃から医師になりたいと考えていたという。16 歳から同じウィーンに住んでいたフロイトと文通を始める。19 歳の時、フロイトの推薦で論文が雑誌に掲載されるが、すでにアドラー (Alfred Adler) の個人心理学に関心が移っていたという。やがてアドラーとも異なる見解をもつようになり、個人心理学協会から除名される。その後はシェラー (Max Scheler) の思想に傾倒し、その影響は一生続くことになる³⁰。

ウィーン大学卒業後、精神科医として活動を始める。しばらくは現場の医師として活動するが、やがてその経験を理論にまよようと考え始める。その頃、すでにロゴセラピー (実存分析) の基本的アイディアが生まれている³¹。しかし 1942 年には強制収容所に送られることになる。

1945 年に解放された後は精力的な活動を開始し、研究者向け、一般向けの著作を次々に発表する。強制収容所での体験を綴った『ある心理学者の強制収容所体験³²』『それでも人生にイエスと言う³³』などが特に有名である。精神科医としては、人生の意味を見出す手助けをするセラピーとされるロゴセラピー (実存分析) の創始者として知られるようになる。

フランクルの著作の中では、精神を主題として論じている『制約されざる

²⁸ *Die Philosophie der Freiheit* ([PF] [シュタイナー2002])。

²⁹ この項については [フランクル 2011] [クリングバーグ 2006] [クリングバーグ 2006a] [諸富 1997] [諸富 2016] [山田他 2002]などを参照した。

³⁰ [菅井 2012] など。

³¹ [諸富 1997, 19-23]によれば、ロゴセラピーのアイディアは強制収容所体験から生まれたという説明がしばしばなされるが、そのような理解は誤りである。

³² *Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager*. わが国では邦訳『夜と霧』([フランクル 1985] [フランクル 2002a])のタイトルで知られている。

³³ *...trotzdem Ja zum Leben sagen* ([TJLS] [フランクル 1993])。

人間³⁴』が考察の主な対象となる。

2.3 二人の関係

二人は当時のオーストリア＝ハンガリー帝国に生まれ、ウィーンで活動していたこともある。また共に第一次世界大戦とその敗戦を経験するなどしている。ただし二人の間に直接の交流はなかったものと推測される。

生存年代はシュタイナーが1861～1925年、フランクルが1905～1997年で、フランクルの方がおよそ半世紀ほど遅い。うち20年ほどは重なるものの、フランクルが医師・研究者として活動を始めたのはシュタイナーの最晩年である。したがってシュタイナーがフランクルの存在を知らなかった可能性は高い³⁵。

二人ともドイツ語を母語とし、ドイツ語圏を中心に活動していることから、フランクルがシュタイナーの思想・活動を知るのは（本人がその気になりさえすれば）容易であったと考えられる。シュタイナーは自らの思想をアントロポゾフィーと名付けているが³⁶、フランクルの著作にはこの名称が見出される³⁷。とはいえ、どの程度の知識をもっていたかについては明らかではない。

3 哲学的素養

思想の比較に入る前に、二人の哲学的素養について確認しておくことは無

³⁴ *Der unbedingte Mensch* ([UM] [フランクル 2000])。

³⁵ ただしシュタイナーは心理学にも強い関心をもっており、たとえば『自由の哲学』では多くの心理学説を引いてその内容を検討している。また講演の中ではフロイトやユング (Carl Gustav Jung) などの学説にも言及している ([シュタイナー1995a] [シュタイナー1995b] など)。なおヴェーア (Gerhard Wehr) にはユングとシュタイナーの思想を比較した『ユングとシュタイナー 対置と共観 (*Jung und Rudolf Steiner—Konfrontation und Synopse*)』([ヴェーア 1982]) というユニークな内容の著作がある。また[西平 2010]ではユング、ウィルバー (Kenneth Earl "Ken" Wilber Junior)、シュタイナーのライフサイクル論が比較されている。

³⁶ シュタイナーは自らの思想を、「人間」と「知恵」を意味する言葉から「アントロポゾフィー (Anthroposophie、人智学)」と名づけている。なおフランクルが生涯にわたって大きな影響を受けたシェラーは自らの思想を、「人間」と「学問 (ロゴス)」を意味する言葉から「アントロポロジー (Anthropologie、人間学)」と名づけている。

³⁷ たとえば [LM, 133] [フランクル 2000, 187]。

駄ではないだろう。結論からいえば二人は十分な哲学的素養をもっており、中でも同時代の哲学にはかなり通じていたと見て差し支えない。また心理学的な学説への言及も数多く見受けられる。

3.1 シュタイナー

彼は実業学校に通っていた16歳の頃、カント (Immanuel Kant) の『純粋理性批判』を購入し、熟読していたことを自伝の中で語っている³⁸。彼は哲学的なものにも強い関心をもっていた。

彼がゲーテ自然学の研究者として出発したことはすでに述べたが、彼の関心は現代でいう自然科学的なものではなく、ゲーテが自然をどのように捉えているかという見方・考え方に向けられていた。その方法を認識論と呼び、その総体を世界観と呼んでも差し支えないであろう。実際、彼はその成果を『ゲーテ的世界観の認識論要綱³⁹』(1886年)、『ゲーテの世界観⁴⁰』(1897年)などにまとめている。

シュタイナーは1891年にロストック (Rostock) 大学から博士号を授与される。論文のタイトルは「認識論の基礎問題——特にフィヒテの知識学を考慮して」であり、これに多少の修正を加え、『真理と学問⁴¹』として翌1892年に出版している。

その翌1893年には『自由の哲学⁴²』を出版している。この中ではカントの認識論を始めとする当時の有力説(心理学的な学説を含む)が多数取り上げられている。

1895年にはニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) について論じた『フリードリヒ・ニーチェ——同時代への闘士⁴³』を出版する。ニーチェへの評価は一般に彼の死後になって高まったものだが、この著作はニーチェの生存

³⁸ [シュタイナー2001, 39-41]。

³⁹ *Grundlinien einer Erkenntnistheorie der Goetheschen Weltanschauung, mit besonderer Rücksicht auf Schiller* (GA2) ([シュタイナー2016])。

⁴⁰ *Goethes Weltanschauung* (GA6) ([シュタイナー1995c])。

⁴¹ *Wahrheit und Wissenschaft* (GA3)。

⁴² [PF] [シュタイナー2002]。

⁴³ *Friedrich Nietzsche, ein Kämpfer gegen seine Zeit* (GA5) ([シュタイナー2008])。

中に著されたもので、ニーチェの思想の意義を非常に早い時期に評価した注目すべき著作となっている。なおシュタイナーは生存中のニーチェにも会っている⁴⁴。

1914年には『哲学の謎⁴⁵』と題する哲学史を刊行している他、彼の著作の中では数多くの哲学者の説が言及されている。

3.2 フランクル

フランクルは精神科医・心理学者として知られているが、思想家としても十分に通用する人物だと考えられている⁴⁶。彼が哲学的問題に並々ならぬ関心をもっていたことは、次の発言からも明らかである。「……私の研究全体をつらぬくいわば赤い糸のごときテーマとは何であったか。それは、特に精神療法における意味と価値の問題に重点を置いた、精神療法と哲学の間の境界領域の解明というテーマであった。はっきり言って、この問題に生涯をかけて取り組んだ者は私を除いてほとんどいないと思う。この問題こそ、私のすべての研究の背後にある主動因なのである⁴⁷」。彼が専門分野として精神科を選んだのも、この分野が哲学的課題と取り組むのに好都合だと考えられたという事情がある。また活動の初期（1939年）には「哲学と心理療法——実存分析の基礎づけのために⁴⁸」という論文を書いている。

前述した通り、フランクルはシェーラーの影響を非常に強く受けており、名著とされる『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学⁴⁹』を聖書のように持ち歩くほどの傾倒ぶりだったという⁵⁰。しかもフランクルは「……ビ

⁴⁴ シュタイナーはニーチェの妹から、ニーチェ文庫の設立について相談を受けている（〔シュタイナー2001a, 30-45〕）。

⁴⁵ *Die Rätsel der Philosophie in ihere Geschichte als Umriß dargestellt* (GA18)（〔シュタイナー2004〕）。

⁴⁶ たとえば『フランクルを学ぶ人のために』（〔山田編2002〕）は全11章からなり、「フランクルの心理学（第I部）」と「フランクルの哲学思想（第II部）」に5章ずつが割当てられている。

⁴⁷ [WNMB, 39-40]〔フランクル2011, 73〕。

⁴⁸ “Philosophie und Psychotherapie, Zur Grundlegung einer Existenzanalyse.”

⁴⁹ *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik*（〔シェーラー2002〕〔シェーラー2002a〕〔シェーラー2002b〕）。

⁵⁰ [諸富2016, 57]。

スワンガーの仕事は、結局ハイデガー派の概念を精神医学に応用したことであり、他方ロゴセラピーは、マックス・シェーラーの概念を心理療法に応用した結果であると主張する学者のいることは、言及するに値しよう」と述べている。ここでは自らの最大の成果ともいえるロゴセラピーが、シェーラーの思想を応用したものであることを暗に認めている⁵¹。

また彼はハイデガー (Martin Heidegger)、ヤスパース (Karl Theodor Jaspers)、マルセル (Gabriel Marcel) などから強い影響を受けたこと、また彼らとの個人的親交などについて語っている⁵²。実際に彼らの名前は(のみならず彼らと一緒に撮った写真も) フランクルの著書の中に散見する。

3.3 主観と客観をめぐる

西洋近代哲学において、認識論における最大の難問とされたのが主観と客観の一致という問題である⁵³。シュタイナーもフランクルもこれについて言及しているので、この問題に対する彼らの態度を簡単に見ておくことにしよう。

この問題は、主観と客観が分裂していることを前提としながら、その間に橋を架けようとするものとなっている。シュタイナーもフランクルもそのような前提自体が誤りであり、その前提に従う限り解決があり得ないことを指摘している。

シュタイナーはこの問題を『自由の哲学』の中で取り上げて詳細に論じている。彼はこの著作の中で、自らが一元論の立場に立つことを明言し、二元

⁵¹ [フランクル 1981, 9]。[諸富 1997, 39] を参照した。

⁵² たとえば [WNMB, 92] [フランクル 2011, 160]。

⁵³ どのような問題かを簡単に紹介しておく。たとえば「赤い花を赤い花として認識するのが正しい認識である」という点に異論はないであろう。通常、その過程は次のように考えられる。まずは外界に客観的存在としての赤い花がある。私とその赤い花を認識する。その時、私という主観の中に認識された赤い花がある。この認識された赤い花(主観における赤い花)と、外界にある赤い花(客観における赤い花)が一致すれば、その認識は正しいとされる。

問題は、この一致が確認できない点にある。私が(私の中で)一致を確認(認識)したければ両者を私の中に取り込む必要がある。しかし取り込まれた時、客観における赤い花は主観における赤い花になっている。客観における赤い花を客観のままに認識することは不可能である。

論ではこの問題は解決できないと述べる⁵⁴。

二元論とは二つのまったく別の世界、完全に切り離された、互いに無関係の世界を想定するものである。二つの世界の間には何らかの関係があれば、それを二元論と呼ぶことはできない。したがって、まったく関係がない二つの世界を想定しながら、その世界の間には橋を架けよう（関係づけよう）という試みはすべて無駄なものとならざるを得ない。また仮に橋を架けられるのであれば、二つの世界の間には何らかの関係があることになるから、二元論という前提を放棄しなければならない。

ではシュタイナーがいう一元論とはどのようなものだろうか。主観と客観が切り離されていない世界とはどのようなものだろうか。彼は一般に認められている「思考は主観的だ」という見解に注目する。「思考は主観的だから、研究においてはできるだけ思考を交えない方がよい」といった見解は現在でも広く受け入れられている。しかしその際、「これは主観的だ」「これは客観的だ」と判断しているもの自体が思考であることが忘れられている。「これは客観的だ」と判断しているのは、主観的とされている思考に他ならない⁵⁵。

主観・客観という区別自体が、すでに一定の前提を設けている。より根源的なところから考えるためには、主観・客観という区別を前提にせず、それを区別する前の思考という段階から考察を始める必要がある。思考から考察を始めることによって、主観と客観という区別を前提にする必要はなくなる。

フランクもこの難問は前提が間違っていることを指摘する。「そのような認識論の根底につねにある考え方は、主観と客観の間には、止揚できない分裂、橋渡しできない断絶、克服できない深遠が存在するというものであります。……（中略）……というのは、この分裂がひとたび確立されたたん、もはやどうしてもこの『深淵』を超えることができないからであります。……（中略）……われわれはどうしても現存在が主観と客観に分裂する以前まで戻らなければなりません⁵⁶」。フランクはこのような誤りの原因が、存

⁵⁴ [PF, 24-25] [シュタイナー2002, 41-42]。

⁵⁵ [PF, 50] [シュタイナー2002, 76]。

⁵⁶ [LM, 86] [フランク 2000, 56]。

在論的關係が存在化されたことにあると指摘している⁵⁷。

4 精神・心魂・身体

すでに述べたように、シュタイナーもフランクルも人間は精神・心魂・身体という三つの構成要素からなるとする⁵⁸。この点についてもう少し詳しく見ておこう。

物質の存在は一般に見たり触れたりすることで、誰にでも確認できる。しかし非物質的なものとなると、少なくとも同様の方法での確認は困難となる。ましてや精神と心魂の区別となればさらに困難である。しかしシュタイナーもフランクルも精神は存在し、それは心魂から区別されると明言する。のみならず、心身(心魂と身体)という捉え方では人間を人間として理解することができないとする。

精神をもつのは人間のみである。したがって、これが人間と動物の違いだと言ってもよい⁵⁹。精神の存在を認めないということは、人間を動物として扱うことに他ならず、人間のもっとも人間らしい部分を無視していることになる。このような点において、シュタイナーとフランクルはほぼ共通の立場に立つ⁶⁰。

⁵⁷ ここではカントやハイデガーの学説が前提とされていると見られる。フランクルによれば、カントがいう物自体に現象界の概念が当てはめられていることからこの問題が発している。なおハイデガーは存在者に関わる存在論的(ontologisch)な問題と、存在に関わる存在的(ontisch)な問題とを区別する。我々が通常「存在」と考えているものは、ハイデガーによれば存在者である。

⁵⁸ 一般に「精神」と「心魂」との間に明確な区別がなされないまま使用されることが多い。そのため特にフランクルが使用する一般的用語あるいは専門用語は本人の意図とずれていたたり、訳語との対応がずれていたたりすることが少なくない。たとえばPsychiatrieは「精神医学」と訳されることが多いが、このもとになっている語はpsychêであり、ギリシア語で精神ではなく心魂を意味する。

⁵⁹ フランクルは次のように述べる。「動物は、その心魂的生活に関して、もしそう言ってもよければ、完全に個別化され尽くしてはいません。その心魂的機能の経過について動物に見いだされるものは、結局まったく種の心魂に属しています」([LM, 136] [フランクル2000, 196])。またシュタイナーは「動物の本質は心魂であり、人間の本質は精神です」([TS, 127] [シュタイナー2000, 158])と述べている。

⁶⁰ シュタイナーは人間の尊厳などについて語る際でも、フランクルほどには精神を強調しない。フランクルの「精神」は、シュタイナーにおいては「自我」に対応すると見られる箇所が非常に多い。この点については後述する。

4.1 フランクル

フランクルによれば人間を精神・心魂・身体と分けた際、精神はいわば使う側であり、心魂と身体は使われる側である。そのため心魂と身体は精神の道具だとされている⁶¹。彼によれば心魂や身体からの影響・束縛に精神が打ち克つことこそが、人間らしく生きることに他ならない。このような点からも精神と心魂は区別される。

彼が使用する用語についても確認しておこう。彼は Geist (精神) や Seele (心魂) に代わって Geistige (精神的なもの)、Seelische (心魂的なもの) をしばしば使用する。ただし Lieb (身体) については Leibliche よりも、ギリシア語の *sōma* に由来する Somatische (身体的なもの) を好んでいるように見える。

身体を意味する言葉として一般によく使用される physisch、あるいは Physische (身体的なもの) の使用は基本的に避けられている。それはこれらの語が物質的なもののみならず自然的なもの、身体以上のものをも意味することによる⁶²。この他、心魂と身体を合わせた psychophysischer Organismus (心身有機体) といった表現もしばしば用いられる。

精神に関しては、ギリシア語の *nūs* に由来する noëtic や noëological といった語を使用することがある⁶³。

4.2 シュタイナー

シュタイナーは人間を構成する三要素について、次のような説明をしている⁶⁴。花に覆われた野原を歩く際、花の色をそのまま受け取るのは身体、花の色に喜びを感じるのは心魂、花の種類や成長の法則を理解するのは精神である。心魂と精神の違いは、心魂が自分との関係で対象を捉えるのに対し、

⁶¹ 「……その道具、すなわち心身有機体を……」(LM, 108)[フランクル 2000, 110] など。

⁶² [LM, 69-70] [フランクル 2000, 12-13]。

⁶³ 特に英語での文章において顕著であり、宗教的な意味を含みやすい spiritual などの使用を避ける意図があるとする。ただしドイツ語の文章でもこれと同じ系統の語が時々使用されている。

⁶⁴ [TS, 23-27] [シュタイナー 2000, 11-16]。ゲーテの文章を題材にして論じている。

精神が自分をいわば無にして捉えることに、また心魂が自分の中にあるもの（喜びなど）を捉えるのに対し、精神が自分の外にあるもの（成長の法則など）を捉えることにあるとする。

ところでシュタイナーは全体をいくつかの構成要素に分ける（区切る）際、しばしば分節（Gliederung）という語を用いる⁶⁵。彼が人間の構成要素について述べる際には、すでに述べた精神・心魂・身体という三分節の他にも四分節・七分節・九分節などが登場する⁶⁶。シュタイナーがもっともよく用いるのは三分節と四分節だが、両者の共通の基盤になっているのは九分節である。

九分節においては、人間がまず精神・心魂・身体の三つに分節され、各々がさらに三つに分節される。以下の論述と関わる範囲で述べるならば、心魂は意識的心魂（Bewußtseinsseele）、悟性的心魂（Verstandesseele）、感受的心魂（Empfindungsseele）に、身体は心魂的身体⁶⁷（Seelenleib）、生命的身体⁶⁸（Lebensleib）、物質的身体（physischer Leib）にそれぞれ分節される。

シュタイナーは進化という視点を重視しており、現在の人間も進化の中で捉えられる⁶⁹。人間の構成要素は、基本的には物質的身体から順に（つまり上記とは逆の順序に）発達する⁷⁰。現在は、発達の中心が悟性的心魂から意識的心魂へと移行しつつある段階とされる⁷¹。

⁶⁵ ここでいう分節とは、昆虫の頭・胸・腹をイメージするとわかりやすい。たとえばその頭は昆虫全体から切り離されているわけではないが、ある程度までは独立し、独自の働きをしている。このように一応は区切れるものの、完全に区切れてはいない状態を分節と呼ぶ。

⁶⁶ 人間は一つの統一体であり、各構成要素はいわば連続的に変化しているため、特定の箇所でも区切ることも区切らないこともできる。区切り方を変えることで、複数の異なる分節も可能になる。

⁶⁷ 「感受的身体（Empfindungsleib）」とも呼ばれる。

⁶⁸ 「エーテル的身体（Ätherleib）」の語がよく用いられるが、ここではわかりやすい「生命的身体」の語を使用する。

⁶⁹ 進化に関するシュタイナーの考えは〔GWU〕〔シュタイナー1992〕などにまとまった形で論じられている。

⁷⁰ とはいえある時期に特定の構成要素のみが発達し、他の構成要素がまったく発達しないというわけではない。特定の構成要素が発達の中心となるものの、他の構成要素もいわばそれに付随するような形で発達する。

⁷¹ 〔AMK, 36〕〔シュタイナー1989, 12〕など。

精神が発達するのはさらにその次の段階となる。したがって大局的に見れば、現時点での精神は未発達な段階にある。精神は人間の中でもっとも上位の構成要素であり、もっとも高度な精神・心魂的機能を司るとはいうものの、現時点では未発達なためにその影響力は小さい。シュタイナーがフランクと同様、精神がもっとも上位の機能であることは認めつつも、フランクほどには大きな比重を置いていない理由の一つはそこにあると考えられる⁷²。

ここで身体に関する用語について補足しておく必要があるだろう。身体を三分節したうちの一つが「物質的身体 (physischer Leib)」と呼ばれているが、この語は一般に「肉体」とも訳される。したがってこの構成要素のみで身体を意味しているようにも思われるからである。

身体を三分節した場合、他の二つは生命的身体と心魂的身体と呼ばれている。このうち後者は前者の、より繊細な部分だとされているから⁷³、両者は一連のものと考えて差し支えない。

生命的身体とは文字通り生命力の担い手である。生きている我々の身体は単なる物質 (物質的身体) ではなく、そこに生命 (生命的身体) が加わっていると考えられることから⁷⁴、これらを合わせたものこそが身体 (Leib) だと理解して差し支えない⁷⁵。

5 自我と人格

人間の中心、私の中の私、個人を統合する中心といえるものを、シュタイナーは「自我 (Ich)」と呼び、フランクは「人格 (Person)」と呼ぶ⁷⁶。前述の通り自我と人格は一般に異なる概念とされている上に、人によってそ

⁷² なお前述した通り、フランクも現在の人間が発展途上の段階であることは認めている。

⁷³ 「すなわちエーテル的身体のある部分はそのほかの部分よりも繊細にできており……心魂的身体になります」(〔TS, 37-38〕〔シュタイナー2000, 31〕)。

⁷⁴ これに加え、厳密に言えば心魂的要素や精神的要素も影響を与えている。

⁷⁵ したがって Lebensleib (生命的身体) と結びつかない physischer Leib (物質的身体) は死体ということになる。

⁷⁶ この点について、シュタイナーには特にフィヒテ (Johann Gottlieb Fichte) からの影響を、フランクには特にシェラーからの影響を見て取るのは、無理な推測とはいえないだろう。

の意味や用法が大きく異なる。とはいえ二人の説明を読む限りでは、シュタイナーの「自我」とフランクルの「人格」の特徴が、かなりの程度まで重なりあうことが確認できる。ただしこれらを精神との関係で見ると、両者のはっきりとした相違が明らかになる。

フランクルは人格を精神の中心と見る。人間の構成要素の中でもっとも上位にあるのは精神であり、それは人間の中心でもある。そしてそのような精神のさらなる中心が人格である。したがって人格を精神、精神を人格と置き換えても大きな問題は生じない。

シュタイナーも、人間の構成要素の中でもっとも上位にあるのが精神であることは認める。ただし人間の中心として機能しているのは自我であって精神ではない。これは前述したとおり、精神が未発達とされていることもあるが、そもそも自我は精神の一部とは見なされていない。自我は主に心魂と共に働くものであり、精神よりも心魂との結びつきの方がはるかに強い。

5.1 フランクルの「人格」

繰り返しになるが、フランクルは人格こそが人間の中心だと考えている。そして人格は精神としばしば置き換えが可能であり、「精神的人格 (geistige Person)」あるいは「人格的精神 (personaler Geist)」といった表現もしばしば用いられる。

彼には「人格についての十題」という論文がある⁷⁷。ここでは人格について十の特徴を挙げその性質を論じている。各項目の冒頭部分のみを引用すると次のようになる。

1. 人格は個人 (Individuum) である。人格は分割不可能である。
2. 人格は単に分割できない (in-dividuum) だけでなく、また合計できない (in-summabile)。
3. 個々の人格はすべて絶対的に新たなもの (Novum) である⁷⁸。
4. 人格は精神的である。

⁷⁷ [ZT] [フランクル 2002] ([フランクル 2011a] 参照)。

⁷⁸ 精神が遺伝などによらないことなどを述べたもの ([ZT, 51] [フランクル 2002, 163-164])。

5. 人格は実存的である⁷⁹。
6. 人格は自我的 (ichhaft) である⁸⁰。
7. 人格は統一体であり全体である (1、2 参照) だけでなく、統一体と全体とを設立する。
8. 人格は活動的 (dynamisch) である⁸¹。
9. 動物は人格ではない。
10. 人格は自分自身をただ超越から把握するほかはない。それだけではない。人間はさらに、自分を超越から理解する程度に応じてのみ、人間である⁸²。

ここで各項目について検討する余裕はないが、シュタイナーの考える自我は、これらの表現のほぼすべてにあてはまると考えられる⁸³。

5.2 シュタイナーの「自我」

シュタイナーは自我こそが人間の本質であり、人間自身だとする⁸⁴。この点はフランクルの語る人格と共通である。また自我は使う側であり、心魂と身体は使われる側、いわば道具であるとも述べている⁸⁵。この点もフランクルの説明と一致する。

⁷⁹ 「人間はつねに彼自身の可能性として実存しているのであって、人間はこの可能性に向って、あるいはそれに反対してみずからの決断を下すことができるのです」と説明している ([ZT, 56] [フランクル 2002, 168])。

⁸⁰ これは人格が「エス的なもの」でないことを述べたものである ([ZT, 59] [フランクル 2002, 170-171])。

⁸¹ 「つまり人格が心身から距離を保ち、心身からみずからを引き離しうるといって、まさにそのことによって、精神的なものははじめて出現しうるので」と説明している ([ZT, 64] [フランクル 2002, 174])。

⁸² 10 についてはその後、大きく変更されているため、最終的な表現を掲載した ([ÄS, 339] [フランクル 2011a, 451])。初版では「最後に、人格はただ神の似姿としてのみ理解しうるもの」となっている ([ZT, 56] [フランクル 2002, 175])。この表現が宗教的と見なされたことから、表現を修正したものと推測される。

⁸³ 最後の 10 については、フランクルの意図を正確に確認する必要がある。ただし他の 9 項目については、シュタイナーの考える自我との間に大きな相違は見られない。

⁸⁴ 「人間の本来の本質である『自我』は……」 ([TS, 43] [シュタイナー 2000, 39])、
「この『自我』は人間自身です」 ([TS, 43] [シュタイナー 2000, 39]) など。

⁸⁵ 「成長するにつれて、人間は身体と心魂という道具をいっそう自分自身の『自我』のしもべとして使うことを学びます」 ([TS, 43] [シュタイナー 2000, 39])。

ただし自我は精神よりもむしろ身体・心魂と共に働く。「人間は『自我』のなかで身体的・心魂的な存在として体験するすべてのことを一つにまとめます。身体と心魂は『自我』の担い手です。自我は身体と心魂の中で活動します。脳が物質的身体の中心点であるように、『自我』は心魂の中心点です⁸⁶。」自我が精神と共に働かないというわけではないが⁸⁷、身体・心魂との関係の方がより密接である。

フランクフルが精神の中心である人格を精神の一部と見ているのに対し、シュタイナーは心魂の中心である自我を心魂の一部とは見ていない。かといって精神の一部とも見ていないことから、彼の考える自我が心魂でも精神でもないことが明らかになる。

自我が心魂でも精神でもないとするなら、人間が精神・心魂・身体からなるとする言い方自体が厳密には誤りということにもなるだろう。ただしシュタイナーは、自我を人間の構成要素に含めていないわけではない。精神・心魂・身体という三分節に自我は含まれていないが、別の視点からなされる四分節では人間の構成要素が自我・感受する心魂的身体・生命的身体・物質的身体の4つとされている。

この四分節も先に上げた九分節が基盤にあり、また進化が前提となっている。自我が共に働く要素も進化と共に変化する⁸⁸。前述の通り、現在は自我が共に働く要素が悟性的心魂から意識的心魂へと移行しつつある段階である。したがって大まかに見れば、共に働く自我と悟性的心魂・意識的心魂を合わせて自我と表現しても大きな問題は生じない。これに加え、互いに密接な関連をもつ感受的心魂と心魂的身体(感受的身体)を合わせて感受する心魂的身体⁸⁹と呼ぶことで、上記の四分節が成立する⁹⁰。この四分節では未発

⁸⁶ [TS, 43] [シュタイナー2000, 39]。

⁸⁷ 「そして精神は『自我』の中に入り込み、そのなかで生きます」([TS, 44] [シュタイナー2000, 40-41])。

⁸⁸ 「なぜなら自我は、みずからが結びついているものをとおして本質と意味を与えられるからです」([TS, 44] [シュタイナー2000, 49-50])。

⁸⁹ 感受的心魂は心魂の一部、感受的身体(心魂的身体)は身体の一部である。ただし両者は感受(知覚など)の際に共に働いており、一体と見なして差し支えない。(そもそも心魂的身体という名称自体が、心魂と共に働くことを意味している。)そこで両者を合わせて感受する心魂的身体(empfindender Seelenleib)と呼ぶ。これはア

達な精神が考慮の外に置かれ、中心的に働いている構成要素のみが列記されていると見ることもできるだろう。自我は精神でも心魂でもないが、それらと共に働く。そして現在の進化段階では主に心魂と共に、心魂の中心として機能しているということになる。

ただし自我は心魂のみならず精神とも働いているし、またそれこそがより自由な状態だとシュタイナーは考えている⁹¹。彼は『自由の哲学』の第9章で彼の（現段階での）理想ともいえる倫理的個体主義（*der ethische Individualismus*）について説明している⁹²。そこでは、いわば自由な境地へと至るいくつかの段階が説明されているが、その程度は心魂的・身体的なものにどれだけ束縛されているか、精神的な機能がどれだけ発揮されているかによって分けられていると見ることができる。

自我が精神の影響をより強く受ける（精神が自我の中でより強く働く）ことが理想ではあるが、その段階に至ることは困難である。現実には、自我が心魂の中心として機能しているというのがシュタイナーの見解だといえるだろう。

5.3 二人の相違点について

すでに見たように、シュタイナーとフランクルは人間が精神・心魂・身体の三要素からなるとする点で共通の立場に立つ。またシュタイナーが語る自我、フランクルが語る人格は共通性が高い。にもかかわらずシュタイナーの語る自我が心魂の中心とされる一方で、フランクルの語る人格は精神の中心とされている。この相違をどのように理解すべきだろうか。以下では、この点についての筆者なりの考えを示しておく。

シュタイナーは自我を精神でも心魂でもないものとして捉えているが、その点を除けば二人の見解はかなりの程度まで一致しており、上記のような相違が出ることも自体が考えにくい。これに関しては事実（彼らが事実として認

ストラルの身体（*Astralleib*）とも呼ばれる。

⁹⁰ [TS, 50-51] [シュタイナー2000, 49-50] など。

⁹¹ シュタイナーによれば、魂を三分節したうちもっとも上位にある意識的心魂は、下位の精神と共に働いている。

⁹² [PF, 121-144] [シュタイナー2002, 165-192]。

識している事柄) についての見解の相違というよりも、シュタイナーが現実をより重視した見解を、フランクルが理想をより重視した見解を唱えていることが、一つの理由として考えられる⁹³。

シュタイナーもフランクルも、自我・人格が「精神」と「心魂・身体」の双方から影響を受けていることを認めている。そしてシュタイナーは後者からの影響が圧倒的に強いと見て、自我は心魂の中心だと説明している。実はフランクルも、後者からの影響が圧倒的に強いことをはっきりと認めている。だからこそ理想とされる自由の実現は容易なことではないと見る。

しかしフランクルは、「それにもかかわらず」人間が自由であること、自由であり得ることを主張する。そのような可能性を語るこそがフランクル哲学の真髄だと言うこともできるだろう。フランクルは人間が「どのようであるか」と共に「どのようであり得るか」を語りながら、前者よりも後者をより重視する。その結果として人格は精神と共に機能すること、人間は自由であり得ることを強調しているのだと考えられる。

シュタイナーは、人間は精神・心魂・身体の三要素からなるとしながらも、実際には精神でも心魂でもない自我という存在を認めている。これに対しフランクルは人間を三要素のみで説明している。したがって人格の位置づけは(間違いなく身体ではないため)精神か心魂かの二者択一にならざるを得ない。ここで仮に「人格は心魂だ」とすれば日常的な人格の働きの説明に関しては支障がないものの、態度価値を始めとするもっとも人間らしい高貴な態度や行動を説明すること、すなわちフランクルがもっとも重視する内容に関する説明が困難にならざるを得ない。フランクルはそのような態度や行動が可能であることを説明することこそが重要だと考えていたために、人格を精神の中心だと主張したのではないだろうか。

⁹³ 二人が考える「精神」「心魂」が必ずしも一致していないことが、より重要な理由と考えられる。この点については別稿において検討する予定である。

略号と参考文献

- ・ 本稿では引用に際し、文意を損なわない範囲で手を加えることがある。(ルビを省略する、傍点を省略する、字間開けを省略する、漢数字を算用数字に改める、改行を無視するなど。)
- ・ 邦訳には注に示した訳書を用いることを原則とするが、訳語や文体の統一などを目的として筆者が訳し直すことがある。また文意を明確にするために原語を補うことがある。

1. R. シュタイナーの著作・講演

シュタイナーの著作・講演(のうち記録が残されているもの)は Rudolf Steiner Verlag 社の全集(Gesamtausgabe, GA)に収録されている。本稿ではこの全集に基づく同社の小型版(Taschenbuch, Tb)を使用。

AMK = *Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik* (GA293). 1919年の講演。Tb617の2015年版(邦訳は〔シュタイナー1989〕)を使用。

GSGK = *Die geistig-seelischen Grundkräfte der Erziehungskunst: Spirituelle Werte in Erziehung und sozialem Leben* (GA305). 1922~1923年の講演。Tb604の1990年版(邦訳は〔シュタイナー2001b〕)を使用。

GWU = *Die Geheimwissenschaft im Umriß* (GA13). 初版は1910年。Tb601の2005年版(邦訳は〔シュタイナー1992〕)を使用。

OP = *Eine okkulte Physiologie* (GA128). 1911年の講演。Tb732の2016年版(邦訳は〔シュタイナー2013〕)を使用。

PF = *Die Philosophie der Freiheit: Grundzüge einer Modernen Weltanschauung, Seelische Beobachtungsergebnisse nach naturwissenschaftlicher Methode* (GA4). 初版は1894年。Tb627の2005年版(邦訳は〔シュタイナー2002〕)を使用。

TS = *Theosophie* (GA9). 初版は1904年。Tb615の2005年版(邦訳は〔シュタイナー2000〕)を使用。

ÜGK = *Über Gesundheit und Krankheit: Grundlagen einer*

geisteswissenschaftlichen Sinneslehre (GA348). 1922 年の講演。Tb722 の 2003 年版 (邦訳は [シュタイナー2004a]) を使用。

2. V. E. フランクルの著作・講演

ÄS = *Ärztliche Seelsorge, Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse*. 初版は Franz Deuticke 社、1946 年。1982 年まで大幅な加筆・修正が行われ、分量はほぼ 2 倍になっている。ZT の最終版を収録した dtv Verlagsgesellschaft mbH & Co. KG 社の 2015 年版、6.Auflage (邦訳は [フランクル 2011a]) を使用。

HP = *Homo patiens: Versuch einer Pathodizee*. 初版は Franz Deuticke 社、1951 年。UM と合冊され LM になる (1975 年)。LM を参照。

LM = *Der leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*. HP と UM の合冊 (1975 年)。1984 年に増補改訂。Verlag Hans Huber 社の 2005 年版、3.Auflage (邦訳は [フランクル 2000] [フランクル 2004]) を使用。

TJLS = *...trotzdem Ja zum Leben sagen: Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*. 初版は Franz Deuticke 社、1946 年。Kösel-Verlag 社の 2015 年版、7.Auflage (邦訳は [フランクル 1993]) を使用。

UG = *Der unbewußte Gott: Psychotherapie und Religion*. 初版は Kösel-Verlag 社、1948 年。dtv Verlagsgesellschaft mbH & Co. KG 社の 2015 年版、13.Auflage (邦訳は [フランクル 2002]) を使用。

UM = *Der unbedingte Mensch: Metaklinische Vorlesungen*. 初版は Franz Deuticke 社、1949 年。HP と合冊され LM になる (1975 年)。LM を参照。

WNMB = *Was nicht in meinen Büchern steht: Lebenserinnerungen*. 初版は Quintessenz MMV Medizin-Verlag 社、1995 年。Verlagsgruppe Beltz 社の 2015 年版、7.Auflage (邦訳は [フランクル 2011]) を使用。

ZT = "Zehn Thesen über die Person." 1950 年の講演。Logos und Existenz: Drei Vorträge, Amandus-Verlag 社、1951 年に収録。原則として上記初版 (邦訳は [フランクル 2002]) を使用。ただし改訂後の最終版は

ÄS（邦訳は〔2011a〕）を使用。

3. その他の文献

井藤 2012：井藤元『シュタイナー「自由」への遍歴—ゲーテ・シラー・ニーチェとの邂逅』京都大学学術出版会

今井 2012：今井重孝『“シュタイナー”「自由の哲学」入門』イザラ書房

ヴェーア 1982：ヴェーア，ゲルハルト（石井良・深澤英隆訳）『ユングとシュタイナー』人智学出版社

金子 2008：金子晴勇『ヨーロッパ人間学の歴史』知泉書館

金子 2012：金子晴勇『キリスト教靈性思想史』教文館

カルルグレン 1992：カルルグレン，フランス（高橋明男訳）『ルドルフ・シュタイナーと人智学』水声社

クリングバーグ 2006：クリングバーグ・ジュニア，ハドン（赤坂桃子訳）『人生があなたを待っている 1—〈夜と霧〉を越えて』みすず書房

クリングバーグ 2006a：クリングバーグ・ジュニア，ハドン（赤坂桃子訳）『人生があなたを待っている 2—〈夜と霧〉を越えて』みすず書房

小杉 2000：小杉英了『シュタイナー入門』ちくま新書

シェーラー 2002：シェーラー，マックス（吉沢伝三郎訳）『シェーラー著作集 1 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学（上）（新装復刊）』白水社

シェーラー 2002a：シェーラー，マックス（吉沢伝三郎・岡田紀子訳）『シェーラー著作集 2 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学（中）（新装復刊）』白水社

シェーラー 2002b：シェーラー，マックス（小倉志祥訳）『シェーラー著作集 3 倫理学における形式主義と実質的価値倫理学（下）（新装復刊）』白水社

シェパード 1998：シェパード，A. P.（中村正明訳）『シュタイナーの思想と生涯』青土社

シュタイナー 1989：シュタイナー，ルドルフ（高橋巖訳）『教育の基礎として—一般人間学—ルドルフ・シュタイナー教育講座 I』筑摩書房

シュタイナー1992:シュタイナー, ルドルフ(西川隆範訳)『神秘学概論』イザラ書房

シュタイナー1995:シュタイナー, ルドルフ(溝井高志訳)『ゲーテの世界観』晃洋書房

シュタイナー1995a:シュタイナー, ルドルフ(冥王まさ子・西川隆範訳)『魂の隠れた深み 精神分析を超えて』河出書房新社

シュタイナー1995b:シュタイナー, ルドルフ(西川隆範訳)『シュタイナー 心理学講義』平河出版社

シュタイナー1995c:シュタイナー, ルドルフ(溝井高志訳)『ゲーテの世界観』晃洋書房

シュタイナー1998:シュタイナー, ルドルフ(高橋巖訳)『神秘学概論』筑摩書房

シュタイナー2000:シュタイナー, ルドルフ(松浦賢訳)『テオゾフィー 神智学』柏書房

シュタイナー2000a:シュタイナー, ルドルフ(高橋巖訳)『神智学』筑摩書房

シュタイナー2001:シュタイナー, ルドルフ(伊藤勉・中村康二訳)『シュタイナー自伝Ⅰ』ぱる出版

シュタイナー2001a:シュタイナー, ルドルフ(伊藤勉・中村康二訳)『シュタイナー自伝Ⅱ』ぱる出版

シュタイナー2001b:シュタイナー, ルドルフ(新田義之訳)『オックスフォード教育講座—教育の根底を支える精神的心意的な諸力』イザラ書房

シュタイナー2002:シュタイナー, ルドルフ(高橋巖訳)『自由の哲学』ちくま学芸文庫

シュタイナー2004:シュタイナー, ルドルフ(山田明紀訳)『哲学の謎』水声社

シュタイナー2004a:シュタイナー, ルドルフ(熊坂春樹訳)『健康と病気について』ホメオパシー出版

シュタイナー2004b:シュタイナー, ルドルフ(高橋巖訳)『オカルト生理学』ちくま学芸文庫

シュタイナー2008：シュタイナー，ルドルフ（西川隆範訳）『ニーチェー
同時代への闘争者』アルテ

シュタイナー2013：シュタイナー，ルドルフ（森章吾訳）『秘されたる人
体生理—シュタイナー医学の原点』イザラ書房

シュタイナー2016：シュタイナー，ルドルフ（森章吾訳）『ゲーテ的世界
観の認識論要綱』イザラ書房

菅井 2012：菅井保『シェラーからフランクへ—哲学的人間学と生命
の教育学』春風社

高橋 1988：高橋義人『形態と象徴—ゲーテと「緑の自然科学」』岩波書
店

塚田 2008：塚田幸三『滝沢克己からルドルフ・シュタイナーへ』ホメオパ
シー出版

塚田 2008a：塚田幸三「フランクとシュタイナーの世界」（高橋和夫・
塚田幸三『いのちの声を聞く—海人／奥遼／ヘレン・ケラー／スウェーデ
ンボルグ／フランク』ホメオパシー出版、所収）

西平 2010：西平直『魂のライフサイクル ユング・ウィルバー・シュタ
イナー（増補新版）』東京大学出版会

広岡 2008：広岡義之『フランク教育学への招待—人間としての在り方、
生き方の探究』風間書房

フランク 1981：フランク，ヴィクトール・E.（大沢博訳）『意味へ
の意志—ロゴセラピイの基礎と適用』ブレイン出版

フランク 1985：フランク，ヴィクトール・E.（霜山徳爾訳）『夜と
霧—ドイツ強制収容所の体験記録』みすず書房

フランク 1993：フランク，ヴィクトール・E.（山田邦男・松田美佳
訳）『それでも人生にイエスと言う』春秋社

フランク 1997：フランク，ヴィクトール・E.（山田邦男・松田美佳
訳）『宿命を超えて、自己を超えて』春秋社

フランク 2000：フランク，ヴィクトール・E.（山田邦男監訳）『制
約されざる人間』春秋社

フランク 2002：フランク，ヴィクトール・E.（佐野利勝・木村敏訳）

『フランクル・セレクション 3 識られざる神』みすず書房

フランクル 2002a : フランクル, ヴィクトール・E. (池田香代子訳)『夜と霧 (新版)』みすず書房

フランクル 2004 : フランクル, ヴィクトール・E. (山田邦男・松田美佳訳)『苦悩する人間』春秋社

フランクル 2011 : フランクル, ヴィクトール・E. (山田邦男訳)『フランクル回想録 20世紀を生きて (新装版)』春秋社

フランクル 2011a : フランクル, ヴィクトール・E. (山田邦男監訳)『人間とは何か—実存的な精神療法』春秋社

フランクル他 2014 : フランクル, ヴィクトール・E. ; ラピーデ, ピンハス (芝田豊彦・広岡義之訳)『人生の意味と神』新教出版社

ヘルレーベン他 2001 : ヘルレーベン, ヨハネス ; 河西善治 (河西善治訳)『シュタイナー入門』ぱる出版

諸富 1997 : 諸富祥彦『フランクル心理学入門—どんな時も人生には意味がある』コスモス・ライブラリー

諸富 2016 : 諸富祥彦『知の教科書 フランクル』講談社選書メチエ

山田 2013 : 山田邦男『フランクルとの「対話」—苦境を生きる哲学』春秋社

山田編 2002 : 山田邦男編『フランクルを学ぶ人のために』世界思想社